

養豚で究極の高品質・安定生産を実現 ～知多ピッグの豚をさらに多くの人へ提供したい～

常滑市 (株)知多ピッグ (都築周典さん)
畜産 (養豚)

【平成 27 年 8 月 20 日掲載】

先端技術の導入や地元産エコフィードの利用により高品質・安定生産を実現し、地元養豚業界の風雲児となっている知多ピッグの都築周典(つづきかねのり)さんをご紹介します。養豚経営に夢とロマンを持ち、県内一の経営規模へと猛進している方です。

農業高校で出会った養豚経営

都築さんの実家は稲作を営む専業農家でしたが、進学した農業高校で畜産を専攻し、養豚経営にめぐり合います。当時の農業高校では、耕畜の複合経営を勧めており、畜産によって排出される堆肥をほ場に投入して耕作する、いわゆる循環型農業の基礎を農業高校で学んだそうです。親戚に養豚農家もいたこともあり、卒業後は、その親戚や愛知県種畜場で研修生として学び、19歳で就農、母豚10頭の子取りから養豚経営を始めました。ただ当時は、なんとしても養豚業で食べていくといった意気込みはなく、いろいろなことに興味があったとのこと。他業種との交流や地域の様々な活動に参加し、この頃の経験が地域を巻き込んだ現在の経営につながっていると感じているそうです。



知多ピッグ 都築周典さん(中央)

結婚、子の就農を機にギアチェンジ

就農した当時は、他の農家と張り合える技術がなく、子豚市場で買い叩かれて悔しい思いをしていたそうです。「ただ『作る』のではダメだ。売れる物 = 買い手が求めている良い物を作る」というマーケットイン発想の必要性を痛感し、後の経営方針に大きく影響することとなります。そのような中、30歳で結婚した都築さんは、それ以降、目覚ましい規模拡大を実現しました。離乳舎、肥育舎、分娩舎と、次々に新設や増設を行い、50歳を過ぎた頃には母豚規模300頭体制になり、相対取引も開始します。この頃になってようやく、自分の商品に自信ができ、経営も軌道に乗り始めたとのことでした。



肥育舎の様子

さらに、知多ピッグの経営にとって重要なポイントが訪れます。後継者として、次男、三男、長男が次々と就農を決意しました。都築さんは、息子たちが自分の意志で挑戦し将来に夢をもって仕事ができるよう、責任者としてそれぞれに部門を任せます。また、平成21年に畜舎の大規模改修を行い、母豚規模を530頭体制へと規模拡大しました。このとき都築さんは58歳。莫大な借入金を抱え、毎月の支払いにも憂慮するような事態になったそうですが、決して弱気になることはなく、さらに良い物を安定して提供するために邁進しました。

先端技術の導入で高品質・安定生産へ



液状飼料を食べる豚

平成 21 年に畜舎を大規模改修した際、リキッドフィーディングシステムやオート・ソーティングシステムなどの先端技術を導入しました。リキッドフィーディングシステムとは、飼料と水を混合し液状にしたものをパイプラインで豚に給与する給餌方式です。粉塵が少なく、飼料や水のこぼれの無駄が減り、夏季でも摂取量が落ちにくいという利点があります。また、オート・ソーティングシステムとは、豚を自動的に体重測定し、出荷体重に達した個体を出荷用豚房に選り分けることができるシステムです。従来は目視で出荷予定豚の体重を推測していましたが、このシステムの導入により、豚の出荷体重の揃いが非常によくなったそうです。

液状飼料を食べる豚

エコフィードで飼料費削減と地域資源循環



エコフィードとなる乾麺

知多ピッグのリキッドフィーディングシステムでは、地元食品工場の製造工程で余剰となる食品などのエコフィード原料とベース飼料を、コンピューター制御で栄養科学的に安定させて混合する機能を備えています。配合飼料として購入すると高価な小麦の代わりに、生麺や乾麺、パン生地等小麦主体のエコフィード原料を積極的に利用していることもあり、飼料費を慣行より 25%程度低減できているとのこと。栄養科学的に精査されているとともに、成分の安定した食品工場由来の余剰食品を利用しているため、豚の嗜好性が良く、肉質の高品質化にも成功しているそうです。地元エコフィードによる資源の有効利用に加え、ふん尿についても速やかに堆肥化处理し、地域の耕種農家へと供給しており、地域内の資源循環が確立されています。

果てしない夢の実現に向けて

現在、知多ピッグの商品は引く手あまたで、供給が追いつかない状況とのこと。そこで、母豚規模を現在の 530 頭から 1,300 頭まで増やす計画が進んでいます。この計画により、繁殖農場と肥育農場を分けることができ、衛生面からも大規模生産にさらに適する農場へと発展する予定です。販売先からは早くも購入依頼が殺到している他、施設の建設や従業員の募集など、代表取締役の都築さんにはやるべき仕事が目白押しとなっています。そのような状況でも、次の目標を見据え、「5年後、新農場がひと段落したころには、六次産業化を図りたい。豚肉や加工品の直売所を作ったり、農家レストランを展開したい。」と語っていました。息子さんたちに任せる



商品写真

のかと質問したところ、「いや、自分がやりたいんだ。息子たちは自分がやりたいと思うことをやってほしい。」と豪快に笑っていました。都築さんの背中を見ている後継者の方々ならきっと、知多ピッグを、さらには愛知県の畜産業界を背負っていってくれることなのでしょう。ご自身の夢も、後継者が経営者として成長する夢も、実現される日を楽しみに待ちたいと思います。

執筆：農業経営課

取材協力：知多農林水産事務所農業改良普及課